校長室だより～燦燦～ №１８３

学級通信その２

2020.9.2

今思うと、教頭先生は「何日までにここまでやってきて」という方法では、私が挫折することがわかっており、毎日毎日の宿題形式にしたのだと思う。確かに１日あたりの原稿量は４００字詰原稿用紙２～３枚で、できないほどではなかった。それでも、毎日苦しかったのは覚えている。自分が教頭になりわかったことだが、教頭職としての仕事の他に、私のような“わかっていない教員”の指導を毎日していくのは、かなりのエネルギーを必要とするはずである。

冬休みが終わり、論文の提出日が近づいてきた。原稿や資料を入れるファイル、インデックスの作り方、表紙の体裁など、マンツーマンで教わった。そして、ようやく完成し、提出したときの解放感といったら。その一方で、充実感や満足感はなかった。表紙はりっぱでも、中身がないことは自分が一番よくわかっていた。教頭先生の期待に応えることはできなかったが、とりあえず教頭先生への義理は果たせた。教頭先生との３か月間のおかげで、教育論文の書き方を知り、学級通信も何とか５０号に到達することができた。

何もわからず愚かな私は、憧れであった学級通信の製本に取りかかる。だが、如何せん５０号では薄い。それでも印刷会社にお願いして、背表紙に文字を入れてもらった。

「平成元年度　学級通信『かがやき』　４年２組　玉川第一小学校」

本気で教員になろうとした２年目が終わり、学級担任だけでなく学年主任として教員３年目をスタートさせた４月のある日、教頭先生に呼ばれた。「高澤先生、今年も論文書くぞ。研究というのはな、継続研究が大切なんだ」心の中では「えっ」と一瞬戸惑ったが、そこには、すぐに「わかりました。今年もよろしくお願いします」と力強く答えている自分がいた。

無理やり背表紙に文字が入れてある「学級通信」は、今も大切にとってある。それを目にするたびに、懐かしさ、恥ずかしさ、感謝の気持ちなど、いろいろな思いが交錯する。

そして、振り返ると、あの２年間にわたる論文作成は、自分のためにがんばったのではなく、いつの間にか、お世話になった教頭先生のためにがんばったのだと気づかされる。教頭先生の期待に応えなければならない、教頭先生を裏切るようなことはできない、そういった思いが強かったように思う。自分のためにではなく、人のためにがんばるのである。後になって気づいたことだが、人は、自分のためにはさほどがんばることはできないが、人のためならば意外とがんばることができるものである。

あの頃は、ただただ必死だった。いつでも、一言教頭先生に「教頭先生、もうだめです」ということはできたかもしれない。だが、その後もそうだが、教員になってから、社会人となってから、一度も「できません」とか「いやです」と言ったことはない。心の中は別として、いつでも「はい、わかりました」「はい、やります」と答えている。だいぶ後になってから「頼まれごとは試されごと」という言葉と出会った。

結局、私の教員人生は、あのときの教頭先生に“方向付け”をしてもらったことになる。私にとっては、あのときの経験が大きい。自分が教頭や校長になり、やるべきことには“人材育成”がある。だが、実際には、さっぱりうまくいかない。いつの間にか、あのときの教頭先生と同じような年齢になった。だが、いまだにあのときのお世話になった恩人ともいうべき教頭先生を越えられずにいる。